

ボードレールの散文詩『孤独』に関する考察 —「ラ・プレス」紙の「校正刷」をめぐって—

北 村 卓

ここに取り上げる『孤独』*La Solitude*は、『夕べの薄明』*Le Crépuscule du Soir*とともに、1855年6月、「フォンテーヌブロー」*Fontainebleau*に発表された、ボードレールの最初の散文詩作品である。以後この作品は、「現在」*Le Présent*紙（1857年8月）、「幻想派評論」*Revue fantaisiste*誌（1861年11月）と発表され、それぞれにヴァリエーションはあるが、初稿と大した差異はない。ところが、『群衆』*Les Foules*、『寡婦』*Les Veuves*、『年老いた香具師』*Le Vieux Saltimbanque*という、ボードレールの散文詩制作史上記念碑的な作品群が発表された翌年の1862年、「ラ・プレス」*La Presse*紙掲載のために準備されたものの、結局日の目を見なかった当の散文詩『孤独』の「校正刷」〈*épreuve*〉を読むと、それ以前の稿とはかなりの隔たりがあることが、一目瞭然に見てとれるのである。¹⁾すなわち、旧テキストでは、内容的にもう一つの散文詩『夕べの薄明』と不可分の関係にあり、登場人物も重複しているのだが、1862年の「ラ・プレス」紙の「校正刷」に到って、「黄昏」と「孤独」のテーマは独立し、二つの作品の相補的な関係は断ち切られることになる。これとともに、量的には以前の約二倍に拡充され、また、「孤独」という主題そのものには変化は見られないが、その展開、そして導き出される結論は大いに異なったものになっている。

1862年以前のテキストでは、孤独の用い方自体が問題となっており、人間を病的にさせ、罪を犯させる類の危険な孤独と、ロビンソン・クルーソーのように、自己を純化し、信仰深く勤勉にさせる善き孤独とが比較分析され、「結局、孤独も黄昏と同様、その用い方に従って善くもなれば悪くもなる…²⁾」といった一般的な、敢えて言えば通俗的な結論に帰着している。また、ここでは、孤独によって得られる快樂が最優位に置かれてはいるが、それ以外の手段による悦びに対する侮蔑の念などは現われていない。

一方、1862年の稿においては、孤独の用い方はもはや問題となっておらず、孤独の状態にあって引き出される悦びと、他者との交わり（特にお喋り）によって与えられる悦びとの対立が中心的テーマとなっている。ここでボードレールは、孤独にとどまることができぬ者達、他と接触し自己を忘却することでしか快樂を得る術を知らぬ者達に対し、痛烈な批判を投げかけている。

このように、この『孤独』という散文詩は、1862年を境に大きな変容を遂げているのである。そしてこれには、その前年に発表された『群衆』を中心とする三篇の散文詩が、密接に関与していると思われる。以下、「ラ・プレス」紙の「校正刷」において、著しい変化が認められる箇所を、順を追って検討して行きたい。なお、各パラグラフの分析の際に掲げた引用文は1862年のテキストを再現しており、また他の作品からの引用も、厳密を期するため全て発表当時のテキストに復元していることを前もって明らかにしておく。

第一パラグラフ

Un grand politique de gazette me dit que la solitude est mauvaise pour l'homme, et, à l'appui de sa thèse, il cite, comme tous les incrédules, des paroles des Pères de l'Eglise. (PPP, 67.)

この部分は、旧稿第一パラグラフ前半部に相当する。もともと詩人に対して語るのは〈le second〉、すなわち『夕べの薄明』に登場する「二番目の友人」であったのが、1862年には、ここに見られるように「新聞のお偉い政治家」〈un grand politique de gazette〉と変えられる。この結果、『孤独』は『夕べの薄明』との繋がりを失い、独立した詩篇となり、内容までもが一新されることになる。また、「全ての不信心家と同様に」〈comme tous les incrédules〉が挿入されることによって、この「政治家」に対する軽蔑の感情が早くもあらわにされる。この人物は、「世紀」*Le Siècle* 紙に代表される、楽観的な進歩主義を奉じる新聞に拠る論客、ジャーナリストと見なされるが、³⁾性善説に立脚し、浅薄な人道主義をふりかざすこの手の新聞、雑誌に対し、ボードレルが強い反感を抱いていたことは周知の通りである。実際ボードレルの作品中には、「世紀」紙への侮蔑的な調子の言及が随所に見受けられる。例えば、同じく1862年9月、「ラ・プレス」紙に発表された散文詩『菓子』*Le Gâteau*では、「人間の性は善であると唱える新聞⁴⁾」の主張は、結末に到って見事に打ち砕かれているし、『群衆』等が発表される直前の1861年10月、「幻想派評論」誌に掲載された「レオン・クラデル作『滑稽な殉教者達』」*Les Martyrs ridicules par Léon Cladel*という評論では、「世紀」紙の論調に染められた若い政治家達が、辛辣な批判の対象となっている。

(1) Il y a une troisième espèce de jeunes gens qui aspire à faire le bonheur du peuple, et qui a étudié la théologie et la politique dans le journal *Le Siècle*; c'est généralement de petits avocats, qui réussiront, comme tant d'autres, à se grimer pour la tribune, à singer le Robespierre et à déclamer, eux aussi, des choses graves, (...).

(...). La troisième catégorie est née de l'espérance de voir se renouveler les miracles de Février. (OC, II, 182-183.)

こうして見てくると、『孤独』の「政治家」の像もかなり鮮明に捉えられる。つまり、進歩や友愛を長々と弁舌を弄して説く論客のイメージが浮かび上がってくる。また、この男は、テキストの後半では「新聞記者」(gazetier)と呼ばれているが、このような人物に対する批判こそが、新たな主題となるのであり、このパラグラフは、言わばその導入部の役割を果たしているのである。

第二パラグラフ後半部

(...). Mais il serait possible que cette solitude ne fût dangereuse que pour ceux dont l'âme oisive et divagante la peuple de leurs passions et de leurs chimères. (PPP, 68.)

このパラグラフの前半部は、旧稿の第一パラグラフ後半部にほぼ一致しているが、ここに引用した後半部(旧稿第二パラグラフ前半部に相当)には興味深いヴァリエーションがある。まず、「フォンテーヌブロー」(1855年)では、「肝心の活動的な思想に支配されていない、無為にしてとりとめのないこれらの魂」とあったのが、「幻想派評論」誌(1861年)においては、「専制的観念に支配されていない、無為にしてとりとめのない魂」となる。が、意味の上では、そう大した差はないと言える。また、この両者の場合は、いまだ『夕べの薄明』と内容的に一体となっている段階であるから、当然、この「魂」とは、『夕べの薄明』に出て来る二人の友人、つまり、黄昏時になって急に乱暴を働いたり、不安におののいたりする友人を指している訳である。そして1862年には、上に掲げたように、「孤独を己れの情熱と妄想とで満たす、無為にしてとりとめのない魂を持つ人々」、続いて1864年の「新パリ評論」誌では、「孤独を己れの情熱と妄想とで満たす、無為にしてとりとめのない魂」と変化する。見ての通り、この二者にも殆ど差異はない。しかしながら、前二者と後二者との間には、微妙ではあるが重要な違いを指摘することができる。それは、1862年の時点で初めて、「孤独を満たす」(peupler la solitude)という表現が使われているということなのである。そしてこの独特の表現は、その前年、散文詩『群衆』の中で既に現われている。

(2) Multitude, solitude, termes égaux et convertibles pour le poète au cerveau actif et fécond. Qui ne sait pas peupler sa solitude ne sait pas non plus être seul dans une foule affairée. (PPP, 31.)

さらにこの先を読めば、「孤独を満たす」術を知ることが、芸術創造の前提条件となっているのがわかる。⁵⁾詩人は、孤独を保持しながら、想像力によって他者の中に入り込み、その者の生を自分のものとして味わい、その者にポエジーを捧げるのである。⁶⁾ポー

ドレールは、これを「魂の聖なる売春」(sainte prostitution de l'âme)と呼んでいる。

(3) Le promeneur solitaire et pensif tire une singulière ivresse de cette universelle communion. Celui-là qui épouse facilement la foule connaît des jouissances fiévreuses, dont seront éternellement privés l'égoïste, fermé comme un coffre, et le paresseux, interné comme un mollusque. Il adopte comme siennes toutes les professions, toutes les joies et toutes les misères que la circonstance lui présente.

Ce que les hommes nomment amour est bien petit, bien restreint et bien faible, comparé à cette ineffable orgie, à cette sainte prostitution de l'âme qui se donne tout entière, poésie et charité, à l'imprévu qui se montre, à l'inconnu qui passe. (PPP, 32.)

このような観点から「孤独を満たす」という表現を捉えるならば、先の『孤独』の一節も容易に理解されるであろう。すなわち、自己を集中させ、創造への意志に満ち溢れた詩人、つまりは「孤独を満たす」術を知る者であれば、「孤独」は何ら危険なものではなく、逆にポエジーを生み出す源となるのであるが、他方、「孤独を満たす」術を知らぬ者、「孤独」を「情熱」や「妄想」で満たしたりする者は、多くの場合、自分自身に耐え切れなくなり、衝動的な行動に走るなどして危険な羽目に陥る怖れが十二分にあるという訳である。とは言っても、やはり詩人の「孤独」も、様々な外的要因によって常に脅かされているのであり、とりわけ、群衆に溢れた巷間を散歩する時に、その危険性は増大する。ボードレールは、1861年6月発表の『ヴィクトル・ユゴー論』の中で、散歩や夢想到に浸ることを「高尚ではあるが危険な趣味」と規定し、その趣味と仕事とを両立させているユゴーに感嘆するとともに、その理由を彼の持つ強靱な精神構造に帰している。⁷⁾要するに、ユゴーは、「孤独を満たす」のに卓越した詩人ということになる。事実、この『ユゴー論』にも、「彼の思想で満たされた孤独」(des solitudes peuplées par sa pensée⁸⁾)といった表現が使用されているのである。『孤独』、『群衆』、『ユゴー論』、この三者の親近性は、単なる表現上の類似のみならず、発表年代が近接していることから、きわめて濃密であると思われる。従って、『孤独』の1862年の稿に初出する「孤独を満たす」という表現も、決して偶発的なものではなく、その当時のボードレールの意識の一端を鮮かに反映していると言えるのではなからうか。

第三～第五パラグラフ

第三パラグラフは、ロビンソン・クルーソーが登場するという点では、旧テキスト第二パラグラフ後半部と関連がある。しかし、内容は全く異なっている。旧稿では、危険を伴

わぬ「孤独」の例としてクルーソーが挙げられ、役に関する記述が中心となっているが、1862年以降の稿では、善き「孤独」の例証としてではなく、お喋り好きの「新聞記者」(先の「政治家」と同一人物)に対する批判の道具として、絶海の孤島にあって神秘的快樂を享受していたロビンソン・クルーソーが引き合いに出されているにすぎない。ここでの中心人物は、クルーソーではなく「新聞記者」の方なのである。また、第四、第五の二つのパラグラフは、1862年に初めて書かれたものであり、やはり駄弁家への嫌悪に満ち溢れている。

第六パラグラフ

Mais je désire que mon gazetier me laisse m'amuser à ma guise. 《Vous n'éprouvez donc jamais, me dit-il, le besoin de partager vos jouissances?》 Voyez-vous le subtil égoïste! Il sait que je ne veux pas des siennes, et il réclame sa part des miennes, l'insidieux usurpateur! (PPP, 68-69.)

このパラグラフも、1862年に新しく書き加えられたものである。ここで件の「新聞記者」は、孤独の快樂に浸る詩人に、「あなたは一体、他人と悦びを分かち合いたいという欲求を覚えたことはないのですか、」と切り出すのだが、ボードレルは、彼の言葉の背後に、我慢のならぬ偽善の匂いを嗅ぎ出す。結局、この男は自分の悦びを秘かにかすめ取ろうと企んでいるのだということを詩人は見抜き、彼を「巧妙なエゴイスト」(subtil égoïste⁹⁾)と批難する。詩人の眼には、この男は、表面上の言葉とは裏腹に、自分のことしか考えず、相手の楽しみに傍若無人に分け入り、それを奪おうとする狡滑な人物と映った訳である。このような行為が、見ず知らずの者にポエジーを捧げるという、ボードレルの「魂の聖なる売春」とは全く相容れないものであることは自明であろう。散文詩『群衆』においても、自己中心的で自分の快樂しか念頭にない者に対し、引用の(3)に見られるように、「エゴイスト」という言葉が使われているのである。¹⁰⁾ つまるところ、『孤独』、『群衆』相方とも、「エゴイスト」として批判の矢面に立たされているのは、同種の人物像なのであり、「魂の聖なる売春」に象徴される詩人の姿勢こそ、そうした批判を可能ならしめるものに他ならなかったように思われる。

第七パラグラフ

《Ce grand malheur de ne pouvoir être seul...》 dit Labruyère, donnant ainsi une belle semonce à tous ceux qui courent s'oublier dans la foule, craignant sans doute de ne pouvoir se supporter eux-mêmes. (PPP, 69.)

ここには、「一人きりでいることができないという、この大いなる不幸……」と、ラ・

ブリュイエールの言葉が引用されている。その限りでは、旧稿第三パラグラフに相当すると言えるが、言葉の解釈に関しては、新旧のテキストの間に大きな隔りがある。旧稿では、先にも述べた通り、この後、「結局、孤独も黄昏と同様、その用い方に従って善くもなれば悪くもなる……」といった具合に続くが、1862年の稿では、この言葉は、「自分自身に耐え切れなくなるのを怖れて、群衆の中に自分を忘れるために駆け込んで行く者達」に対する戒めとして援用されているのである。また、この一節は一読したところ、散文詩『群衆』の主題と相対立するかに見えるのだが、決してそうではない。このことを、エドガー・ポオの短篇小説『群衆の人』*L'Homme des Foules* についてのボードレールの見解を通して、確認してみたい。

ボードレールが、1855年に翻訳したこの『群衆の人』のエピグラフには、ラ・ブリュイエールの同じ言葉が用いられており、『孤独』の当の一節は、このポオの短篇小説に想を得たものであろうと推測される。さらに、1852年に発表された最初のポオ論『エドガー・ポオ、その生涯と作品』では、群衆の流れの中を絶えず彷徨する一人の老人(=「群衆の人」)に向かって、ボードレールは、「これは孤独を怖れる罪人なのか、自分自身に耐えることができない愚か者なのか¹¹⁾」という問いを発しているのだが、一見してわかるように、『孤独』の一節と酷似した表現が用いられている。しかしながら、この「群衆の人」は、散文詩『群衆』における詩人とは、群衆の中を漫歩すること以外、何一つ共通点を持っていない。実際に『群衆の人』を読めば諒解されることなのだが、詩人の像と一致するのは、この短篇小説の語り手、すなわち、カフェの窓越しに群衆を眺め、ついには「群衆の人」の後を執拗に追うに到る一人の「回復期の男」(convalescent)なのである。1863年発表の『現代生活の画家』*Le Peintre de la Vie moderne* でも、このポオの小説への言及が見られるが、ボードレールの関心は、「群衆の人」からその語り手の方へ完全に移ってしまっている。

(4) Vous souvenez-vous d'un tableau (en vérité, c'est un tableau!) écrit par la plus puissante plume de cette époque, et qui a pour titre *L'Homme des foules*? Derrière la vitre d'un café, un convalescent, contemplant la foule avec jouissance, se mêle, par la pensée, à toutes les pensées qui s'agitent autour de lui. Revenu récemment des ombres de la mort, il aspire avec délices tous les germes et tous les effluves de la vie; comme il a été sur le point de tout oublier, il se souvient et veut avec ardeur se souvenir de tout. (OC, II, 689-690.)

この回復期にある観察者の姿は、勿論「現代生活の画家」たるコンスタンタン・ギースの特質を説明するために、持ち出されたものであるが、同時に『群衆』等におけるボード

レー自身姿でもある。また、「回復期の男」とは、自己を集中させつつある男の謂に他ならない。この時、男は「一切を思い出す」のである。これは、「孤独を満たす」術を知らず、自分自身に耐え切れなくなり、自分を忘れるために群衆の中に身を投げ出す、といった行為とはまさしく対極にある。

こうした視点に立てば、『孤独』のこのパラグラフは、『群衆』と矛盾するどころかその立場を同じくするものであるということが理解されるであろう。そしてまた、当パラグラフにおける批判も、やはり、孤独を享受することのできない饒舌な「新聞記者」に差し向けられているのである。¹²⁾

第八パラグラフ

《Presque tous nos malheurs nous viennent de n'avoir su rester dans notre chambre,》 dit un autre sage, Pascal, je crois, rappelant ainsi dans la cellule du recueillement tous ces affolés qui cherchent le bonheur dans le mouvement et dans une prostitution que je pourrais appeler *fraternitaire*, pour parler la belle langue du dix-neuvième siècle. (PPP, 69.)

1862年に初めて加えられたこのパラグラフでは、「売春」《prostitution》という語が否定的に用いられており、散文詩『群衆』における「魂の聖なる売春」の賞揚とは明らかに相対立しているかに見える。しかしながら、ボードレールにあっては、この「売春」という語はもともと両義的な意味合いを担っている。¹³⁾この相違を明確に踏まえた上で、『群衆』と『孤独』とに目を向ければ、この両テキストは、互いに矛盾するどころかきわめて強い連続性を保っていることが理解されるであろう。もし、このパラグラフの「売春」を「魂の聖なる売春」と同一のものとするならば、ここでの批判は、結局ボードレール自身にも及ぶことになり、コンテクストと著しく食い違ってしまう。なぜなら、今まで見てきた通り、『孤独』において終始一貫批難されているのは、饒舌な「新聞記者」なのであるから。また、『孤独』を読解するに際して、常にその鍵としてきた『群衆』が、ここに到って『孤独』と敵対するとは、到底考え難いのである。

さて、ボードレールの作品、特に『日記』の中に頻出する「売春」という語は、非常に特殊な意味内容を持っており、金銭的観念や猥褻な観念は拭い去られ、自己を脱出し、他者へと向う動きを指し示すのに用いられている。とは言うものの、常に同一の高尚な意味合いで使用されている訳ではない。次に引く『赤裸の心』*Mon Coeur mis à nu*の一節には、孤独を恐れ、その恐怖から逃れるために他者と交わり、自分自身を忘却しようとする、言わば凡人が行なう「売春」と、孤独にとどまりながらも「独特の方法」で他者と交流するという、「天才」が行なう「売春」とがはっきりと区別されている。

(5) Goût invincible de la prostitution dans le cœur de l'homme, d'où naît son horreur de la solitude. — Il veut être *deux*. L'homme de génie veut être *un*, donc solitaire.

La gloire, c'est rester *un*, et se prostituer d'une manière particulière.

C'est cette horreur de la solitude, le besoin d'oublier son *moi* dans la chair extérieure, que l'homme appelle noblement *besoin d'aimer*.

(OC, I, 700.)

ここで「天才」を「詩人」に置き換えるならば、当然「独特の方法」で行なう「売春」とは、『群衆』における「魂の聖なる売春」に相当すると言えるだろう。そして、通常凡人が耽っている軽蔑すべき「売春」こそ、この『孤独』最終パラグラフにおける「売春」に他ならない。つまり、この卑しい「売春」に浸る者の像は、「世紀」紙のような偽瞞的な新聞に拠って徒党を組み、一人では楽しむことができず、他人と交わりながら駄弁の快樂の中に己れを忘れる「新聞記者」の像と重なり合うのである。¹⁴⁾このように考えるならば、『孤独』のこのパラグラフは、『群衆』の主題と全く矛盾しないことになるし、またコンテキストとも合致するのである。

さらにこの見解の妥当性を、このパラグラフに現われる「友愛的」《*fraternitaire*》という語の解釈を通して確認してみよう。この語は、「二月革命党员」《*quarante-huitard*》のボキャブラリーから、ボードレールが新しく造り出した語とされている。¹⁵⁾二月革命は、ボードレールにとって、言うまでもなく大いに重要な出来事だったのだが、晩年、ボードレールは、この革命に対し、苦々しい否定的な感情を抱いていた。そして、引用の(1)の最後の箇所に見られるように、革命の理想を、今度は「世紀」紙に集うブルジョワ的進歩主義者達の理想にだぶらせ、彼らを批難するに到るのである。従って、『孤独』において、革命の理想を皮肉ったようなニュアンスを持つ《*fraternitaire*》という語が、件の「新聞記者」を揶揄、嘲笑する目的で使われているというのも、充分頷けるのである。¹⁶⁾

* * *

以上、散文詩『孤独』の1862年の稿（「ラ・プレス」紙の「校正刷」）の中に、その前年に発表された三篇の散文詩、とりわけ『群衆』とのきわめて親密な類縁関係を確認することができた。また、これと同様の展開が、散文詩『夕べの薄明』にも見い出されるのである。¹⁷⁾これらのことは、『群衆』をはじめとする三篇が、ボードレールの散文詩制作の過程において、いかに重要な作品群であるかを端的に物語っている。すなわち、この三篇によって、ボードレールは、散文詩制作への明確な展望を獲得したのであり、また、これは時期的にも、韻文詩から散文詩への移行の一つの大きな節目となっているのである。

注

本文中に引用するボードレールの作品のテキストおよびヴァリエーションは、下記の版によった。

○散文詩篇：BAUDELAIRE, *Petits Poèmes en Prose*, édition critique par Robert KOPP, José Corti, 1969. (PPP と略記)

○その他の作品：BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, texte établi, présenté et annoté par Claude PICHOS, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1975—1976, 2vol. (OC と略記)

(引用の際、上記の略号に続くローマ数字はその巻数を、アラビア数字はその頁数をそれぞれ示している)

また、散文詩における言葉の使用例、頻度等に関しては、次の著作を随時参照した。

Robert T. CARGO, *Concordance to Baudelaire's Petits Poèmes en Prose, with Complete Text of The Poems*, The University of Alabama Press, 1971.

- 1) この後、1864年12月、「新バリ評論」*Nouvelle Revue de Paris*誌に発表（「校正刷」も有）され、1869年、「ミシェル・レヴィ」Michel Lévy版全集に収められることになるが、1862年以後の諸稿の間には、それほどの変異はない。
- 2) 《Il en serait donc de la solitude comme du crépuscule; elle est bonne et elle est mauvaise, (...), selon qu'on en use, (...).》(PPP, 70.)
- 3) 例えば、PPPの注を参照。PPP, 274.
- 4) 《les journaux qui prétendent que l'homme est né bon》(PPP, 41-42.)
- 5) 孤独と創作活動とは、ボードレールにあっては密接な関わりを持つ。例えば1862年発表の散文詩『午前一時に』*A une Heure du Matin*の最終パラグラフを参照。
- 6) これは、『寡婦』、『年老いた香具師』、1863年発表の散文詩『窓』*Les Fenêtres*におけるような、他者に関する「伝説」《légende》の創造に他ならない。
- 7) *Réflexions sur quelques-uns de mes Contemporains, I. Victor Hugo*, OC, II, 129.
- 8) *Ibid.*, OC, II, 130.
- 9) 1864年以降のテキストでは、《subtil envieux》に変えられる。従って、《égoïste》が現われるのは、1862年の稿のみということになる。
- 10) 散文詩篇における《égoïste》の使用例は、他に二例を数えるのみであり、そのうち

の一つは、『群衆』と同時発表の『寡婦』中に現われる。

- 11) 《Est-ce un criminel qui a horreur de la solitude? Est-ce un imbécile qui ne peut pas se supporter lui-même?》(Edgar Allan Poe, *sa Vie et ses Ouvrages*, OC, II, 277.)
- 12) 1864年、「新パリ評論」誌に発表の時には、ラ・ブリュイエールについて、「ベルギーできわめて軽蔑されているフランスの作家」《Auteur français, très-méprisé en Belgique》という注がつく。これは、この年のベルギーへの講演旅行の経験が反映しているのだが、ボードレールのベルギー人批判の根底にあるものは、軽薄な進歩への信仰や付和雷同の精神への憎悪なのであって、「世紀」紙に対する批判と共通する。
- 13) この点に関しては、ジャック・クレペとジョルジュ・ブランによる『日記』の注釈本に詳しい。またここでも、『孤独』と『群衆』との対立が指摘されている(BAUDELAIRE. *Journaux intimes*, édition critique établie par Jacques CREPET et Georges BLIN, José Corti, 1949, 204-209. を参照)。
- 14) 次の『赤裸の心』の一節も、同様の文脈で理解できる。

Il y a aussi des gens qui ne peuvent s'amuser qu'en troupe. Le vrai héros s'amuse tout seul. (OC, I, 682.)

ここでの批判の対象はベルギー人なのであるが、ボードレールのベルギー人に対する嫌悪感は、注の12)で述べた通り、「世紀」紙に集う連中に対するものと同質なのである。

- 15) ロベール・コップの注(*PPP*, 278.)を参照。
- 16) 旧稿最終パラグラフに《fraternel》という形容詞が使用されているが、軽蔑的ニュアンスは全く感じられない。つまりボードレールは、「新聞記者」を批判するため、1862年の稿でわざわざ《fraternitaire》という新語を造り出したのであろうと推測される。
- 17) この点については、拙論「ボードレールの散文詩『夕べの薄明』に関する考察—「ラ・プレス」紙の「校正刷」をめぐる—」,大阪大学文学会,待兼山論叢第16号,1982. を参照。

(D. 在学中)